

「はたらく」ことの楽しさと自分の可能性を切り拓く
こども仕事体験フェスタ

2024年7月20日、さいたまスーパーアリーナで「みらいワクワク！こども仕事体験フェスタ」が開催された。イベントは損害保険ジャパン株式会社が企画立案、さいたまこどもみらい仕事体験実行委員会として事務局を務め、さいたま市の共催で実施した。さいたま市内の小学生を対象に、仕事を体験してもらうことで、「はたらく」ことの楽しさと自分の可能性を切り拓く機会を提供することがテーマで、イベントには、応募者数3,530人から抽選で選ばれた小学生220人と、家族を含め約650人が会場のさいたまスーパーアリーナに集合した。参加した子どもたちは、初めての仕事体験に目を輝かせながら取り組み、真夏の会場は熱気で溢れていた。

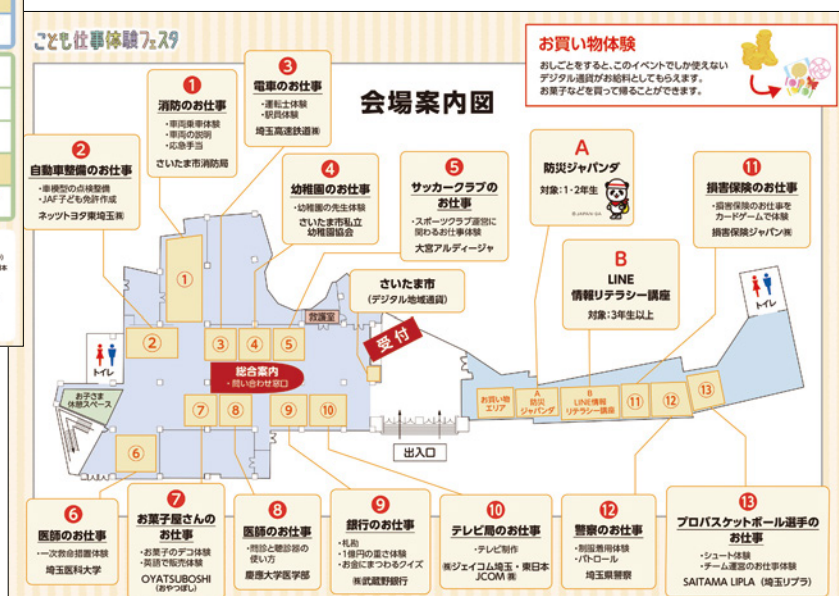
13 種類の仕事から希望した仕事を体験

こども仕事体験は、あらかじめ自分が希望した仕事を2種類体験できるプログラムで、午前、午後の二部制で行われた。体験業種は下の案内図の通り13種類用意された。社会のインフラを支える警察官や消防士、医師、テレビ局や鉄道会社の社員、サッカー

選手やバスケットボール選手など話題のスポーツ、女子児童に人気の高い保育士やお菓子屋さん、自動車ディーラーの仕事など、子どもならずとも目移りしてしまう仕事体験が会場に集結した。

仕事体験ができる子ども向けのイベント施設はあるが、地域内の事業者が一堂に集まり、現場で実際に活躍する人たちの話を直接聞けて、実際の備品にも触れることができるというコンセプトのイベントは極めて珍しい。

例えば埼玉県警のブースでは、不審者に扮した警察官に別の警察官の指示のもと職務質問をする体験や、太宮アルディージャのブースでは、サッカー選



お仕事事例

銀行のお仕事



武蔵野銀行は“銀行のお仕事”をテーマに「こども仕事体験フェスタ」に参加しました。

当日、現場スタッフとして参加した武蔵野銀行総合企画部サステナビリティ推進室の伊藤貴美子調査役に話を聞きました。

◇ ◇ ◇

—— どのようなプログラムを提供されたのでしょうか。

“お金の役割”と“銀行の仕事”を学んでいただく講座に加えて、模擬紙幣を使用してお札を数える札勘と呼ばれる体験、そして1億円の重さ体験です。

—— 準備で苦労された点があれば教えてください。

これまで当行で行ってきた小学生向けの金融経済教育を活かしたプログラムとしたため、準備では特に苦労はありませんでした。

—— プログラムを通じて、子どもたちに伝えたかった点は何ですか？

お金の役割（価値・交換・貯蓄）と「お金を得る手段＝働くこと」、「銀行の仕事（預金・融資・為替）」についての講座が、子どもたちの金融リテラシーの向上につながるものになって欲しいということ。札勘などの体験が、銀行の仕事について興味関心を持つきっかけとなって欲しいという思いで取り組みました。

—— 体験内容の中で、最も子どもたちの評価が高かったことは何でしょうか？

子どもたちが一番楽しんでいたという点でいうと、1億円の重さ体験でしょうか。“1人で持てるよ！”と笑

顔を見せている姿はとても楽しそうでした。

—— 体験の中で、子どもたちの予想外の反応や意外性がありましたか？

普段“お金は物を買うもの”と考えている子が多いようで、“価値を決める・交換の手段・貯めておける”を説明する「お金の役割」の話の時には、講師からの説明に目を丸くする、“初めて知った！”というような表情を見せる子が多かったです。また、札勘体験では難しい指の動きもスルスルとこなし、上手にできる子が多く驚きました。

—— 仕事体験を通じて伊藤さんのご感想をお聞かせ下さい。

子どもたちは、大人が思っている以上にお金や経済について知りたいと思っていると感じました。子どもだからまだ難しいだろう、理解できないだろうと決めつけてしまうことは「知りたい」という意欲を削いでしまうことになります。

今回、参加した子どもたちには、これから必要になってくる高い金融リテラシーのための学びや、将来には様々な職業の選択肢があるということについて「もっと知りたい」と思い行動する第一歩として欲しいなと思いました。

「地域のために、未来のために、子どもが輝くまちへ」

さいたま市 経済局 商工観光部 地域活性化推進室 室長（兼）都市戦略本部 未来都市推進部 副参事 有山 信之氏

去る、7月20日「こどもみらい仕事体験inさいたま市」が、地域愛溢れる実行委員会を中心に15の企業・団体のボランティアで開催されました。真剣な眼差しで体験する子どもの姿からは、子どもの無限の可能性を拓き、地域の未来へとつながる貴重な「体験・学びの場」であると感じました。そして、体験イベント終了後の子ども、保護者、そしてボランティアで参加したスタッフの「笑顔」は、地域のために、未来のために、子どもが輝くまちへつながる活動であったことの証左であります。あらためて、このイベントの開催にご尽力されたすべての方に感謝を申し上げます。



Interview



損害保険ジャパン株式会社 埼玉中央支店
田名田 曜行 支店長

「みらいワクワク！こども仕事体験フェスタ」を企画、運営を指揮された損害保険ジャパン株式会社埼玉中央支店の田名田曜行支店長に話を伺いました。



—— イベントの成果についてご感想をお聞かせください。

今回のイベントでは、14の出展者（企業・団体等）に参加していただきました。また、参加者は、本イベントへの応募総数 3,530 名の中から抽選で選ばれた 220 名（倍率は約 16.1 倍）のお子さんとその付き添いのご家族を含め、総勢約 650 名程度のみなさんに会場に足を運んでいただきました。対象はさいたま市内の小学生であり、今回参加をされたほとんどの方が、少なくともひとつは、自身が希望した職業を体験することができたと思っています。

当日は、ケガ人や体調を崩されたお子さんもほとんどなく、皆さんの顔つきや表情が生き生きしていました。また、参加されたお子さんの両親に話を聞くと“すごく良かった”と返答をいただきました。



ご協力をいただいたさいたま市の担当者からも、これだけ盛大に親子を集めて、地域の中で一体感ある取組みができたことに本当に感謝しているというコメントを頂いています。初回としては大成功であったと考えています。

—— イベントを決められた経緯を教えてください。

当社は以前から、地域貢献活動については、全国の支店単位で行ってききました。埼玉県内でも、以前から越谷レイクタウンで開催される埼玉県・越谷市の防災フェスにブースを出展するなど積極的に取り組んできました。ただ、そうした地域貢献活動だけでは、地域課題の解決や地域に根差した企業・団体との共創・協働にはなかなか行き着いていないという課題がありました。これからも、お客様や社会からの信頼を受けていくためには、地域の課題をしっかり解決できる取組みをしなければいけないという考えのもと、“子ども”に視点を置き、今年度から新たに全社的な取組みとして仕事体験フェスタを実施することを決めました。

—— こども仕事体験フェスタのアイデアが選ばれたのは？

企画の立案やさいたま市との連携等は昨年度にスタートしていました。これまでも、当社は、子どもに視点を置いて社会貢献活動を行ってききました。小学1年生になるお子さんたちの黄色いワッペン事業や防災ジャパンダブルプロジェクト（将来を担う子どもたちとその保護者を対象に、災害から身を守るための知識や安全な行動を身につけてもらうことを目的としたプロジェクト）がその大きな例となります。

そこで、地域が抱える課題の解決（地域社会の担い手・就業機会）にいつそう貢献していくことを目的として、本アイデアが選ばれた次第です。

—— 子どもに就業体験をさせる点に着眼されたきっかけは？

子どもは誰も自分が将来、どういう仕事に就くのか考えます。この企画は、地元で働いている人たちがこんなに身近にいるということを教え、伝えることで、将来の自分の姿をイメージしていただく。就業体験を通じた活動は間違いなかったと思っています。

—— 埼玉で第1弾をやることになった理由は？

「さいたま市に協力いただいたことが大きかったです。企業への声掛けなど、かなりサポートしてくださいました。また、さいたま市では、7月31日からデジタル通貨のサービスをスタートしていますが、参加頂いたお子さんに、就業体験として200円の仮想通貨をプレゼントして使ってもらいました。デジタル地域通貨の実証実験の場にもなったと思います。

—— 今後この活動をどのように継続していくのでしょうか？

全社的には2024年度中にあと全国5～6箇所（5

箇所が確定。1箇所が調整中）で実施する予定です。この企画は、3年前に沖縄の支店社員が起案したアイデアなのですが、その後、沖縄県では県が予算をしっかりとって、県の取組みとしてやっていくことが決まりました。自治体とのコラボレーションができあがり、イベント会社に外注できるパッケージを組むことができると。継続開催ができるのではないかと考えています。

—— 損害保険会社としてこうした活動に取組む社会的意義について、どのようにお考えでしょうか？

これまで損害保険会社の取組みと言えば、例えば、災害を未然に防止するとか、自動運転による事故の削減に取組むなどでした。では果たしてこうした活動と地域社会の課題解決がイコールになるのか。保険に近いことだけに取組んでいけばいいのかという疑問があり、改めて地域の課題にしっかり対応していくことが、今の我々に求められている社会価値の発揮なのではないかと考えています。地域の課題を解決することが、我々の会社の経済価値を上げることにどう結びつけていくかという課題はありますが、地域課題を解決していくことがこう繋がっていくという事例としてしっかり見せられると考えています。

